



吉田素子会員 藍綬褒章受章おめでとうございます

調停委員功勞により藍綬褒章を拝受致しましたことに対し、大学女性協会札幌支部の皆様より過分なお祝いを頂戴致しました。単なる会費会員への手厚いお計らいに、厚く御礼申し上げます。皆様への御礼につきまして支部長にご相談申し上げましたところ、ミニ・ニュース 204 号への寄稿をご提案頂き、まずは誌面をお借りして御礼申し上げることと相成りました。皆様本当にありがとうございました。

菩提寺のご住職(光暁寺様とはご親戚です)は、とても法話がお上手です。工夫をしていらっしゃることを伺いましたところ「私は聴き手に伝わることを心掛けております。どんなに立派な教えでも、難しくて伝わらなければ意味がない、と親鸞上人も仰っております」とのことでした。さすがです。

「トータルソリューションの提供でリソースの集中を可能に」「ポートフォリオの整理と共にグループシナジーを創出」「キャリアアドバイザーとしてアサイン」皆様、何を意味するか理解できますか？私は英文科ですが、ちんぷんかんぷんです。これは、私どものところに提出された、ある中途採用者の職歴です。他にも問題があったので不採用にしましたが、話が通じない人とは仕事ができないと思ったのも一因です。

文章であれ、会話であれ、伝わらなければ意味がありません。巷にあふれている横文字の専門用語が日本語の意味を曖昧にし、伝わりにくくしているように思います。ことばが伝わらないことには、他にも要因があります。それは、お互いの心が繋がっていないことです。調停の場に持ち込まれる離婚、相続などの争いでは相手と心が繋がらず言いたいことが伝わらなくなっています。調停委員は当事者双方の話を聞いて、伝わらなかった話を紐解くことから始めます。調停の結果が、双方にとって幸せなものとなるかどうかは別の話ですが、そもそも心が繋がっていれば、争いはまず起きません。

というような調停の仕事を 30 年続けて藍綬褒章を頂きました。
ところで、拙文は皆様に伝わりましたでしょうか？

吉田素子

本部一般奨学生・札幌支部奨学生選出の報告

2024 年度一般社団法人大学女性協会国内奨学生募集に札幌支部から推薦した室蘭工業大学の大学院生松林美樹さんが本部一般奨学生に選ばれました。おめでとうございます！松林さんは、『繰り返し大規模地震動を受ける RC 部材の損傷と回復性能評価に関する研究』に取り組まれています。地震大国の日本で松林さんの研究が活かされることを願っております。

また、札幌支部奨学生としては、北海道大学大学院生の秋山美香さんを選出いたしました。秋山さんには 2 月 12 日に行われた札幌支部 ZOOM ミーティングにて、研究報告をしていただきました。秋山さんの研究『ルワンダの少数民族・トゥワによる平和の実践—キガリの壺づくりを事例として—』は、大変興味深い内容で、過去の悲劇的な対立を乗り越えて共存しようとしているルワンダの民族の実例は、世界的な紛争地域の課題解決につながるのではないかと希望を持てる内容でした。今後のご活躍を期待しております。



2024年度 第2回例会

「チェコでの暮らし～23年の学び（生活、仕事、子育て）」コトラ亜希子さんのお話



11月6日、チェコ共和国プラハ市在住のコトラ亜希子さんを講師にお迎えし、表題のテーマでお話を伺いました。

コトラ亜希子さんは札幌市出身。2001年にご夫君の故郷プラハに居を構え、金融機関勤務を経て、現在二人のお嬢さんを育てながら、監査法人で仕事をしておられます。その傍らで、外部委託の現地コーディネーターとしてJETROプラハの事業のお手伝いも。日本の中小企業などがチェコに進出した際、現地企業との橋渡し役として商習慣の説明、取引契約、現地駐在日本人の相談に乗っておられるそうです。その実務経験の豊富さと現地社会へすっかり溶け込んでおられるようすがお話の端々から感じ取られました。

チェコ共和国は東欧の国、というイメージがありますが、「東欧国=共産圏」というイメージがあるため、ビロード革命（共産主義国から民主主義国へ）とビロード離婚（スロバキアとの分離）のあと（ちなみに、ビロードと呼ぶのは平和裏に改革が進んだため）、中欧または中東欧の国と呼ぶそうです。カフカやミュシャの故郷。あるいはドボルザークの「新世界より・家路」の曲はあまりに有名。今では北海道人の誇り・やり投げの北口榛花さんがトレーニング拠点にしている国、WBCで日本チームと戦って交流を深めた国として、なんとなく親近感を抱いている方も多いでしょう。

そんなチェコ共和国ですが、実は私はチェコ人のことをほとんど知りません。チェコ人はスラブ系民族ですが、打ち解けるのに多少の時間はかかるが、一度信頼関係が構築されると誠心誠意とても親しい付き合いが行われるそうです。しっかり目を見て話をするが、むやみに相づちを打ったり、気持ちを大げさに顔に出したり、あいまいな笑顔を見せたりしないといいます。ビジネスの現場で日本・チェコの国民性を相互にアドバイスするコトラさんならではの言葉と思いました。それは、アングロサクソン人やラテン人とも少し違うし、日本人と正反対のように聞こえます。お話をお伺いしていると、むしろそのほうが人間関係ラクだろうなとひそかに思いました。

仕事に対しては、決められた仕事を自分のペースでこなすこと、残業をよしとしないことなどは、日本人が見習うべきではと思います。また、残業をしないのは、ひとつには家族を大切にするためでもあるそうです。普通、女性も男性と同様に働いているので、家庭では男女ともに家事を行う、のですって！それは、小学生のときから、学校のグループ学習で、自分の意見を表明すること、個人を尊重すること、男女は平等であることを徹底的に学習するためのようです。教育です！

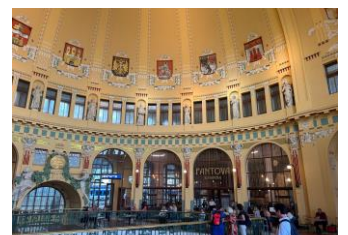
一方で、2024年GGGIは104位。118位の日本よりは上なのですが、男女同権の教育なのに？と思われました。やはり政治場面への女性参加の少なさや、企業のトップの主流が男性であるということが影響していそうです。ここが両国ともネックですね。

参加者から質問も活発に出され、コトラさんは一つ一つ丁寧に答えてくださいました。コロナ下でのようす、お子さんの日本語の獲得や育児サポート、通勤時間の長さなどです。その中で興味深かったのは、都市部に暮らすチェコ人の多くが別荘を持つ、という事実です。都市部での住宅事情とアウトドア志向の両方があることなのでしょう。また、コロナ下に都市部から退避した理由もあったようですが、郊外の自然豊かな地に大小の差はあれ別荘を買い、自力でリノベーションを行い、年代物の家具調度を大切に使いながら（薪ストーブで調理するとおっしゃっていました）、夏を過ごすということです。なんとぜいたくな暮らしでしょう。うらやましい限りです。

札幌とプラハ、そして、全国各地から、さらにニュージーランドからも参加いただけたのは、オンライン開催ならではの。札幌に今年一番の寒気、夜には雪予報の寒い一日でしたが、オンライン会場は熱気に包まれた楽しい時間を過ごしました。

筆者は、10年ほど前にチェコを車で旅した経験があります。プラハは数日を過ごし、旧市街を歩き回りました。実は、愛読書の舞台であり「聖地巡礼」の気分だったのですが、街の美しさ食べ物のおいしさは言うまでもなく、他の欧米諸都市で味わうような怖い思いやいやな思いを一つも感じませんでした。ですので「死ぬまでにもう一度行きたい国！」と思っています。今回、コトラさんのお話をうかがい、ますますその思いを強くしたところです。

参加者 21名（札幌支部 8名、全国支部 7名、その他 6名）野寄由利 記



例会後アンケートより

質問： 有意義だったところはどのようなところですか

チェコで実際にお仕事、子育てをなさっているお話を直接お聞きできたこと。

チェコ人の実際の生活に興味があった。

現地に長年暮らしたからこそ見えてくるものを話していただき、とても興味深かったです。高齢による聞き取りの問題を抱えている私個人としては、講師の方にももう少しゆっくり話していただけたらもっと理解できたのにと少し残念でした。

働き方ですね。job description 契約書 50年前の米国では、仕事内容の取り決めや、勤務時間取り決め守ることが正しいと管理職コース学生時代に 教わりました。日本に帰国後、真反対に馴染むのに時間がかかりました。チェコ特有では無いと思って聞いていました。

チェコでご自分の能力を生かして活躍し、また家庭生活も豊かに過ごされている様子を伺い感心しました。最近のチェコについても知ることができました。

チェコについて具体的な資料が沢山用意されていたため、実態がよく理解できた。

チェコと日本のGDP(PPP)は大きく違わないのに、彼の地では人々がゆとりある生き方を大切に、実践していると知ることができた。それが文化の違いなのか、社会制度にあるのかが、欲を言えば、知りたかった。

ビロード離婚により1992年12月31日でチェコスロバキアはチェコ共和国とスロバキア共和国に分かれました。チェコスロバキアが二つに分かれる数日前の12月25日から27日までクリスマス真ただ中のプラハで観光をしていました。当時夫のパリ駐在に同行していましたので、ほんの数日でしたがこのような時期のプラハを体験することができました。

Kotora 亜希子さんの現在のプラハのご報告は、私の記憶の底にある厳冬のプラハの景色に春の夏のプラハを加えてくださいました。当時のチェコ人のガイドさんの「春のプラハは本当に美しいのです」との言葉を思い出します。

何よりも、生の生活を知ることができたのは楽しい時間でした。日本とチェコの架け橋のお仕事は神経を使われることだと思います。お二人のお子様のご教育も大切なことと同時に悩みの1つですね。これからのご活躍をお祈りしています。有難うございました。

私自身海外に住んでいるので、海外でどのように生活しているのかをしっかりと伺えることはとても勉強になります。

質問 その他講師への質問やご意見

きれいなPPを用意していただき有難うございました。

他県からの視聴でしたが、お誘いありがとうございました。

大変面白かったです。現地で長年暮らしている方のお話をお聞きする機会はめったにありません。コトラさま、本当にありがとうございました。実はロシアのウクライナ侵攻に対するチェコの方々の反応を知りたかったのですが、私のPCが動かなくなってチャットも出来ず音声も出なくなってしまいました。ちよっぴり残念。支部の役員の皆様、お疲れさまでした。

札幌支部のつながりの深さに感銘を受けています。

コトラさんによる第2弾の研修会も期待したいです。

お世話になりました。進行はとてもスムーズだったと思います。札幌支部のまとまりの良さが感じられました。

ニュージーランドもアウトドアが盛んな国ですが、概して現地在住の日本人もアウトドアが好きな方が多い印象です。私はインドア派だと言にくい雰囲気は日本人社会の中にもあり、アウトドアが苦手だと正直に言える日本人社会がうらやましく思いました。チェコに移住されてもキャリアを継続されていることには尊敬の念しかありません。

2024 年度第 3 回例会

豊平館歴史連続講座「開拓期の女学生」を受講して

講師は北海道開拓の村学芸員西田結香さん。札幌支部からは朝日支部長、川岸さん、押谷の3名が参加しました。年の瀬 12 月 19 日、会場は札幌市内中島公園にある明治初期に建てられた国指定重要文化財「豊平館」のホールで行われました。

まずは女学生を「現在の高等学校に当たる年代を対象とする」、女学校は「実科・裁縫・実業学校などは含まず、普通教育下の女学校」と定義し、①国内・道内の教育に携わった人々②年代ごとに見る道内に設置された高等女学校③当時の女学生の生活④現在まで残る道内の女学校の例として函館の遺愛学院の建物や資料が紹介されました。

北海道の開拓長官でもあった黒田清隆は札幌農学校の設立はもとより、日本の発展には女性の教育が必須として、自分の部下であった津田仙の娘、津田梅子を岩倉使節団に加わらせるなど、女子教育にも大なる貢献があったことを始めて知りました。

また実際の教育には海外から来た宣教師が携ったそうですが、明治末期までに来日した宣教師は 83 名。中でも女性宣教師に認められていた仕事は女性の教育のみであったということです。

(女子高 41 校、男子校 26 校)

北海道内では黒田清隆→札幌農学校→新渡戸稲造→河井道（津田梅子と同じ大学に留学）→北星女学校、また関西方面では新渡戸稲造→新島襄→同志社女学校、関東では黒田清隆→津田梅子→女子英語塾（津田塾大学）といったように人から人への女子教育の熱意のバトンが繋がっている様子が図式で示され、このバトンが現在に至っていることを実感しました。

明治 5 年（1872 年）に学制公布、9 月に開拓使女学校が東京・芝増上寺境内に設立、明治 8 年（1875 年）この開拓使女学校が札幌に移転し、札幌女学校と改称され、道内最初の官立学校となりました。学費は官費でまかなわれたそうですが、卒業後は北海道の人と結婚するという条件付きであり、北海道の発展のためにも高等教育を受けた女性を道内に留まらせたいという熱意を感じずにはいられませんでした。

明治 15 年（1882 年）創立の函館遺愛学院の書類には当時、静岡、青森、北見、樺太からの入学者があったと記載されており、親も子も並々ならぬ決意があってこそその学問の習得であったのであろうと深い感動を覚えました。

この講座をご紹介くださった堀内さんは体調不良のためにご欠席されましたが、とても学びの多い内容で、大変感謝しております。ありがとうございます。

押谷君予



近年増えはじめている日本での移民。北海道でも 2022 年度 45,491 人の外国人移住者を受け入れている。そこで、今後の日本の移民を考えるきっかけとして、村田さんから、第 2 弾として、ニュージーランド（以下 NZ）に移住された 12 年間の移住体験をもとに、上記のテーマで移民の受け入れ方を常に工夫している NZ の移民事情・永住権取得の経緯・現地での生活アドバイスなどを中心に女性の視点も含めてお話していただいた。

村田さんはフィリピン出身のご主人の NZ での仕事内定がきっかけで、2012 年から現在まで、14 歳の娘さん、7 歳の息子さんとご家族でオークランド市に在住され、永住権も取得された。オークランドは、NZ 最大の都市であるが、人口は札幌より 26 万少ない 170 万人である。

NZ は日本とほぼ同じ国土面積に、人口約 540 万人。2023 年の人口統計では、NZ 全体の人種構成はヨーロッパ系(67.8%)・マオリ系(17.8%)・アジア系(17.3%)・マオリ以外のポリネシア系(8.9%)。17 世紀のマオリ移住にはじまり、1990 年代以降、移民政策は出身地システムからポイントシステムへの移行で移民数が増加。2000 年以降は経済的な関心事とリンクされ、2021 年には 3 年以上 NZ 在住就労ビザ保有者への永住権発給改正も実施された結果、オークランドでは、アジア系がヨーロッパ系の比率を抜く変化がみられる地域もある。

NZ の移住システムは時代によって変化。村田さん一家が移住した際はポイントシステムで永住権取得。約 6 か月の審査期間を経て期間限定永住権を取得。その後の 2 年間に、年間半年以上 NZ 滞在条件をクリアでき、無期限永住権の取得ができた。審査の内容は、学歴、仕事、語学力、健康状態など多岐にわたった。

このようにして永住権を取得された村田さんだが、2012 年オークランド到着から現在までの現地生活の 12 年間で、住宅（賃貸・購入）・出産・子供の教育・自動車運転免許取得などの経験をする。永住権取得者は生活の多くの面で費用負担が優遇される。公共教育費と公立病院医療費が無料。大学授業料も学部により異なるものの、永住権があると 70-100 万円程度（無し 400-500 万円程度）。また、各種の手当や保障の支給対象となる。

子供の教育と居住環境については、NZ では居住区の小学校から高校まで入試なしで進学する。地域によって雰囲気や人種構成も違い、学区も考慮しなければならないため、自分たちに合う地域を見つけるために時間を要した。車社会なので自動車運転免許取得も大切。

住宅状況は持ち家志向が強い。賃貸は 3 か月に 1 回の立入検査や短い予告期間での解約通知や家賃の大幅な値上げなどがある点でも日本とは異なると感じる。息子さんの出産体験で、日本との医療制度の違いを強く感じた。

12 年間のオークランド生活で感じている移住の魅力は、日本にはない非常に平和でリラックスした生活スタイル。公園でゆったり、庭でバーベキュー。また 週末にはビーチ・キャンプなどのアウトドア・アクティビティも。ブッシュ・ウオークといわれる森林散策が一番好き。女性の立場からみると、フェアで権利意識がしっかりと根付いている国。NZ に限らないかもしれないが、移住してマイノリティの立場になるということは、大変さと自由さの表裏がある。社会の主流の生き方に束縛される感じや生き方の制限もなく、工夫次第では移住者が自由に力を発揮できるとも言える。できる限り移住先の国の良さに気づき、多角的に理解するために、その国について様々な勉強をすることを心掛けている。

参加者からは、NZ の移民のスタンス、NZ からオーストラリアへの移動理由、議会でのマオリ割合、日本の技能実習生と移民の就労環境比較、日本の移民対策への意見、女性校長先生の数など教育現場におけるジェンダーギャップの質問。アンケートでは、暮らしてみないと分からないニュージーランドのあれこれ。移民・教育環境などについての理解が深まり有意義。質疑応答時間がもう少しほしかったなどのご意見があった。

(参加者数 講師を含む 18 人)

(堀内満智子 記)



清華亭吟行句会に参加して

十月十二日、俳句同好会では、北海道大学とその近くにある清華亭界隈の吟行が行われた。当初天候が危ぶまれていたが、晴れ。この清華亭は札幌市の有形文化財に指定されている明治時代の和洋折衷建築であり、門をくぐると端正な庭が広がっている。ボランティアの方が、建設当時からあった春楡の木や蝦夷山ツツジ、一位の木のことなど詳しくご説明くださり、建物の中に、日本間に設けられた縁側からは庭が一望でき、秋の日差しの中、心休まるひと時であった。その後自由に庭や清華亭の前に広がる公園などを散策しながら、句作。石川啄木の直筆を彫った歌碑などもあり、二名の方がこの歌碑を俳句にしていた。ちょっとした起伏のある公園には様々な秋の花が咲き乱れていた。スマホで調べ、「盗人萩」と出てきた花が話題になったが、どうもこれは誤りであるらしいことがその後の句会で判明した。そんなエピソードも心に残る。

句会は近くにある「ぶあいそ別邸」で。句会場であるこのレストランも大正期に建てられたレトロな建物で趣があり、掘り炬燵になった部屋で、鯛茶漬けなどおいしくいただいた。

吟行句会の醍醐味は時間と場所を共有しながら、それぞれが句にしたものは驚くほど違い、新たな発見の連続であることかもしれない。私などは「見た」と自分では思っている、実際は見過ごしていたものが多いことをいつも痛感する。それがまた楽しい。

句会の締めくくりは陽美保子先生による投句されたすべての句に対する講評で、いつものことながら学ぶことが大変多かった。

「またここで句会もいいですね、次は違うものをいただこうかな」などと話しながら、散会した。

(川岸雅子記)



俳句同好会二〇二四年度自選三句



陽美保子
雨だれの向かうから来る緑の夜
別の世へ鷺が飛びたつ水の秋
雪呼び合へる落葉松と白樺と

押谷君子
若菜冷え湖畔の小さき資料館
馬鈴薯の土に残るや十勝の香
初句会手稲の山に陽のありて

川岸雅子
片蔭を行く花束を抱へ行く
鉛筆を削る勤労感謝の日
鈴懸の木肌に触れる寒の入

佐藤麻利子
白壁を白木蓮の抜きん出て
壁のごとポプラ並木の茂かな
「小吉」を結ぶ高さや初みくじ

下山陽子
括りてもかはらぬ淡さ紫苑かな
階下より猫の鳴声明易し
啓蟄やパソコンで見る住所録

鈴木真理
焼菓子のならびたる箱冬満月
ブローチの青の光れる初句会
薄氷を踏み割る仮面割るやうに

高橋房子
木の瘤につまづきもして巢立ち鳥
青空に濁点として寒鴉
三寒や一樹に群れる雀どち

出口好子
ファックスの文字のかすれて昭和の日
蒸気吐く圧力鍋や夏来る
昼寝覚親指小指薬指

松原一枝
花曇り明るきことと憂きことと
パンプスの心もとなし忘れ雪
木漏れ日の地に届きたる冬柏

ささやかなしあわせ

陽美保子

臙にて寝ることさへやなつかしき

森澄雄

春の夜のなんともなつかしい気分。母の温みを感じるかのような臙のやさしさ。「寝ることさへやなつかしき」とは、まるでいったんあの世へ行って、またちよつとこの世に戻ってきたら、ああ、寝ることもこんな感じだったよなあ、なつかしいなあと思っているよなあ、いや、あの世この世の境などなくなっているよなあ、そんな臙夜の雰囲気です。

森澄雄が脳梗塞で倒れてからの作ですが、病に倒れてもこのような俳句ができればどんなにいいだろうと思います。作者をそして読者をも癒してくれます。自分ではこのような句はとでもできませんが、一読して、ああいいなあと思う、それだけでしあわせです。ささやかなしあわせを味わいたい方、ぜひ一緒に俳句を楽しみましょう！



充実のJカフェ

第17回 香り文化のルーツを辿る
2024年11月30日(土) ZOOM開催
講師 江崎 一子さん
大分支部会員、医学博士



2時間の中に、人類が誕生した500万年前から現代まで、アメリカ大陸には行かなかったけれど、訪れた地域は広範囲にわたり、まさに時空を超えて、地理、歴史、宗教、文学など多くの分野にわたる壮大なお話でした。

20世紀になってウズベキスタンで砂に埋もれた中から発見されたマコギ・アツタリ・モスク（穴の中・葉草・モスク、の意味）は、6世紀までは、仏教寺院、その後、ゾロアスター教、イスラム教モスクとなり、三層の痕跡が見られるとか。ここに香料取引所があったそうです。日本に関しても、仏教と一緒に伝わった香り文化、源氏物語に見られるお香、香水産業の拠点になったフランスのグラスのお話。盛沢山な充実した時間でした。「大分香りの博物館」にも行ってみたいと思いました。

(参加者 24名)

第18回

日本初女性法律家たち ～虎に翼によせて～
2025年2月8日(土) ZOOM開催
講師 佐賀 千恵美さん
京都支部会員、弁護士

NHKの朝ドラ、「虎に翼」の寅子のモデルである三淵嘉子さんについてのお話。第二次世界大戦前は、女性には選挙権もなく、裁判官や検事などの公務員にもなれなかった。そんな昭和15年(1940年)に、三淵嘉子さんは、中田正子さん、久米愛さんとともに、日本で初めて女性で、弁護士になった。

ご自身も弁護士でいらっしゃる佐賀さんは、日本の女性法曹の草分けについてのまとまった本がないことに気づき、調査、取材を始められた。1991年、『華やぐ女たち 女性法曹のあけぼの』が出版された。

2023年に復刻版が出版された。

朝ドラと現実は違うところもあるが、演じた俳優さんのお名前をあげて、戦後の家庭裁判所のお話をしていただき、分かりやすかった。また、ZOOMで参加していた会員の中から、実際に三淵嘉子さんにお会いになった方や、栄養失調で亡くなった「花岡判事」の奥様の絵が、飾られている教会のお話をお聞きすることができ、JAUWならではの事、と感心。貴重な講演会でした。(参加者 40名)

(朝日幸世)

編集後記：2024年度の札幌支部の活動は大変意欲的な活動となり、おかげさまでミニ・ニュース204号も多くの記事が集まり、盛りだくさんの内容となりました。記事を寄せてくださった皆さまありがとうございました。
(瀧元)